

中国怪奇小説集

続夷堅志・其他

岡本綺堂

青空文庫

第十の男は語る。

「わたくしは金・元きんげんを割り当てられました。御承知の通り、金きんは朔北さくほくの女真族じょしんぞくから起つて中国に侵入し、江北に帝と称するのと百余年に及んだのですから、その文学にも見るべきものがある筈ですが、小説方面はあまり振わなかつたようです。そのなかで、学者として、詩人として、最も有名であるのは元好問げんこうもんでありましょう。彼は本名よりも、その雅号の元遺山げんいざんをもつて知られて居ります。前に『夷堅志』が紹介された関係上、ここでは元遺山の『続夷堅志』を紹介することに致しました。

元は小説戯曲勃興の時代と称せられ、例の水滸伝すいこでんのごとき大

作も現われて居りますが、今晚のお催しの御趣意から観みますと、戯曲は勿論例外であり、小説の方面にも多く採るべきものを見いだし得ないのは残念でございます。就いてはまず『続夷堅志』を主として、それに元代諸家の作を付け加えることにとどめて置きました」

梁氏の復讐

戴たいじゆう 十

十というのはどこの人であるか知らないが、兵乱の後は

洛陽の東南にある左家さかそう荘に住んで、人に傭やとわれて働いていた。い

わゆる日傭ひよう取りのたぐいで、甚だ貧しい者であつた。

金の^{きん}大定^{たいてい}二十三年の秋八月、ひとりの通事（通訳）が畑の中に馬を放して豆を食わせていた。それは通事が所有の畑ではなく、戴が傭われて耕作している土地であるので、戴はその狼^{ろう}藉^{ぜき}を見逃がすわけには行かなかった。彼はその馬を叱^おつて逐い出した。それをみて通事は大いに怒った。彼は策^{むち}をもつて戴をさんざんに打ち据えて、遂に無残に打ち殺してしまったので、戴の妻の梁^り氏は夫^{ようし}の死骸を営中へ舁^かき込んで訴えた。通事は人殺しの罪をもつて捕えられた。

この通事は身分の高い家に仕えている者であつたので、その主人が牛三頭と白金^{こく}一筋をつぐなうことにして、梁氏に示談を申し込んだ。

「夫の代りにあの男の命を取ったところで、今更どうなるものはあるまい。夫の死んだのは天命とあきらめてはくれまいか。おまえの家は貧しい上に、二人の幼い子供が残っている。この金と牛とで自活の道を立てた方が将来のためであろう」

他の人たちも成程そうだと思つたが、梁氏は決して承知しなかつた。

「わたしの夫が罪なくして殺された以上、どうしても相手を安^{あんの}穩に捨てて置くことは出来ません。この場合、損得などはどうでもいいのです。たとい親子が乞食になつても構いませんから、あの男を殺させてください」

こうなると、手が着けられないので、他の人たちも持てあまし

た。

「おまえは自分であの男を殺すつもりか」と、一人が訊きいた。

「勿論です。なに、殺せないことがあるものか」

彼女は袖をまくって、用意の刃物を突き出した。その権幕が怖ろしいので、人びとも思わずしりごみすると、梁氏は進み寄って縄付きの通事を切った。しかもひと思いには殺さないで、幾度も切って、切って、切り殺した。そうして、いよいよ息の絶えたのを見すまして、彼女はその血をすくって飲んだ。あまりの怖ろしさに、人びとはただ呼い呼吸きをのんでいると、彼女は二人の子を連れて、そのままどこへか立ち去った。

(続夷堅志)

樹を伐る狐

鄭村の鉄李ていりという男は狐を捕るのを商売にしていた。大定たいていの末年のある夜、かれは一羽の鴿はとを餌えさとして、古い墓の下に網を張り、自分はかたわらの大樹の上に攀よじ登つてうかがっていると、夜の二更にこう（午後九時—十一時）とおぼしき頃に、狐の群れがここへ集まつて来た。かれらは人のような声をなして、樹の上の鉄を罵った。

「鉄の野郎め、貴様は鴿一羽を餌にして、おれたちを釣り寄せるつもりか。貴様の親子はなんという奴らだ。まじめな百姓わざも出来ないで、明けても暮れても殺せつしよう生ばかりしていやあがる。」

おれたちの六親眷族ろくしんけんぞくはみんな貴様たちの手にかかつて死んだ

のだ。しかし今夜こそは貴様の天命も尽きたぞ。さあ、その樹の上から降りて来い。降りて来ないと、その樹を挽ひき倒すぞ」

なにを言やあがると、鉄も最初は多寡たかをくくつていたが、狐らはほんとうに樹を伐るつもりであるらしく、のこぎりで幹を伐るような音がきこえはじめた。そうして、釜の火を焚たけ、油を沸かせと罵り合う声もきこえた。かれらは鉄をひきおとして油煎いりにする計画であることが判ったので、彼も俄かに怖ろしくなったが、今更いまどうすることも出来ない。

「ともかくも樹にしっかりとかじり付いているよりほかはない。万一この樹が倒されたら、腰につけている斧おので手当り次第に叩たたつ

斬つてやろう」と、彼は度胸を据えていた。

幸いに何事もないうちに夜が明けかかったので、狐らはみな立ち去った。鉄もほつとして樹を降りると、幹にはのこぎりの痕あとらしいものも見えなかった。ただそこらに牛の肋あばらほね骨が五、六枚落ちているのを見ると、かれらはこの骨をもつてのこぎりの音を聞かせたらしい。

「畜生め。おれを化かして嚇おどかしやあがつたな。今にみろ」

かれは爆発薬を竹に巻き、別に火を入れた罐を用意して、今夜も同じところへ行くと、やはり二更に近づいた頃に、狐の群れが又あつまつて来て樹の上にいる彼を罵った。それを黙って聴きながら、鉄は爆薬に火を移して投げ付けると、凄まじい爆音と共に

火薬が破裂したので、狐らはおどろいて逃げ散るはずみに、我から網にかかるものが多かった。鉄は斧をもつて片端から撲り殺した。

(同上)

兄の折檻

王おうという役人は大定年中に死んだ。その末の弟の王確かくというのは大酒飲みの乱暴で、亡き兄の妻や幼な児をさんざんに苦しめるのであるが、どうにも抑え付けようがないので、一家は我慢に我慢して日を送っていた。

そういう苦勞がつづいたために、妻はとうとう病いの床に就く

ようになった。ある夜のことである。夜も更けて、ともしびも消えたとき、暗いなかで何やら衣摺きぬずれのような音が低くきこえた。やがてまた、そこらの双陸すごろくや棋石ごいしに触れるような響きがして、誰か幽かすかな溜め息をついているようにも聞かれた。

それが亡き夫の霊で、乱暴者の弟が勝負事にふけるのを嘆息しているのではないかとも思われたので、彼女は泣いて訴えた。

「末の叔父さんには困り切ります。さりとてお上かみで罰して下さるというわけにも行かず、このままにしていたら私たち母子おやこはどうなるか判りません」

それから五、六日を過ぎないうちに、王確は酔しやうつて裏という所へ出かけた。帰りには日が暮れて、趙ちやうという村まで来かかると、

路のまんなかで兄の王に出逢った。とうに死んでいる筈の兄は、地に筋を引いて一々に弟の罪状をかぞえ立てた上に、馬の策むちをふるって続け打ちに打ち据えたので、さすがの乱暴者も頭を抱えて逃げ廻わって、僅わずかに自分の家へ帰ることが出来た。

燈火あかりの下でよく視ると、彼の着物はさんざんに破れているばかりか、背中一面が青く腫れあがっていたので、彼はいいよおびやかされた。翌朝かれは兄の画像の前に百拝して、以来は決して酒を飲まなくなった。

(同上)

古廟の美人

こうねい
ろざんこう
広寧の閭山公の廟は靈驗いやちこなるをもつて聞えていた。

殊にその木像が甚だ寧惡である上に、周囲には古木うつそうとして昼なお暗いほどであるので、夜は勿論、白昼でもここに入るものは毛髪おのずから立つという物凄い場所であつた。夜が更けると、神か鬼か知らず、廟内で罪人を拷問するような声がきこえるという噂も伝えられた。

参知政事の梁りようしゆく肅は、若い時にこの郷の※馬けんばれい嶺さとというところ

に住んでいた。彼は挙子きよしとなつて他の諸生と夏期講習の勉強をしている間に、あるとき鬼神に関する噂が出て、誰が強かつたとか、誰が偉かつたとか言っていると、梁は傲然べいぜんとして言つた。「わたしはどの人も強いとは思わない。そんなことは誰にでも出

来るのだ。論より証拠で、わたしは日が暮れてから閭山の廟へ行って、廟のなかを一周してみせる」

「ほんとうに行くか」

「おお、いつでも行く」

「行ったという証拠をみせるか」

「わたしが通ったところには、壁や板に何かのしるしを付けて置く」と、梁は答えた。

若い者にはよくある習いで、その明くる晚いよいよ一緒にゆくことになった。但し他の諸生は門外に待っていて、梁ひとりが廟内の奥深く進み入るのである。彼は恐るる色なく、木立ちのあいだをくぐりぬけて、古廟のうちへ踏み込むと、灯^ひひとつの光りも

ないので、あたりは真の闇であつた。手探りでしるしを付けながら、だんだんに廟の東の隅まで廻つてゆくと、何者かが壁に倚りかかっているのを探り当てた。それが人であるか鬼であるか判らないので、梁は門外へ引返して、燈火を取つて来て更によく照らしてみると、それは一人の若い女であつた。

女は容貌きりようがすぐれて美しい上に、その服装もここらには見馴れないほどに美麗なものであつた。こんな女がどうしてここにいたのか、その子細をたずねようとしても、彼女は氣息きそく奄々えんえんとしてあたかも昏睡せる人の如くである。そこへ他の諸生らも集まつて来て、これはおそらく本当の人間ではあるまい、鬼がこんな姿に變じて我々をあざむくのであらうなどと言いながら、しばらく

遠巻きにして窺っていると、女はやがて眼をあいて、あたりを見まわして驚き怖れるような様子であつた。

「おまえは人か鬼か。一体どこから来た」と、梁は訊いた。

「わたくしは楊州ようの或る家の娘でございます。きよう他へ興こしい入れをする筈で、昼間から家を出ますと、その途中で俄かに大風が吹いて来まして、どこへか吹き飛ばされたように思っています、それから先は夢うつつでなんにも覚えて居りません」

それを聞いて諸生らは喜んだ。梁にはまだ定まった妻がないので、神が楊州から彼に美人を送つて来たのであらうと言つた。梁もそうであらうかと思つて、結局連れて歸つて自分の妻としたが、あとで聞くと彼女は楊州でも人に知られた大家たいけの娘であつた。

梁はそれから十数年の後、大いに立身して高官にのぼった。妻は数人の子女を儲けて夫婦むつまじく暮らした。

(同上)

捕鵜ほじゆんの児

平輿へいよの南、函頭かんとう村の張老ちやうろうというのは鵜うずらを捕るのを業としていたので、世間から鵜と呼ばれていた。

張はすでに老いて、ただ一人の男の児を持つていただけであったが、その児が十四、五歳になった時に病死したので、張夫婦は老後の頼りを失った悲しみに泣き叫んで、わが子と共に死にたいと嘆いた。その翌日になつても死体を埋葬するに忍びないので、

瓦を積んで邱おかを作つて、地下一、二尺のところに納めて置いた。

「わたしの児はまた生きて来る」と、彼は言つた。

それを愚痴と笑う者もあれば、憫あわれむ者もあつた。死後三日目に、張夫婦は墓前に伏して、例のごとくに慟どう哭こくをつづけていると、たちまち墓のなかで呻うなるような声がきこえたので、夫婦はおどろいて叫んだ。

「わたしの児は果たして生き返つたぞ」

瓦を壊こわして、棺をかつぎ出して、わが家へ連れ帰ると、その児は湯をくれ、粥かゆをくれと言つた。暫くして、彼は正氣にかえつて話した。

「はじめ冥府めいふへ行つた時に、わたしは冥府の王に訴えました。な

にぶんにも父母が老年で、わたしがいなくなると困ります。その余命をつつがなく送って、葬式万端の済むまでは、どうぞ私をお助けくださいと願いました。王も可哀そうに思ってくれたと見えて、それではお前を帰してやる。帰ったらば親父に話して、今後は鶉捕りの商売をやめろと言え。そうすれば、おまえの寿命も延びることになる」

張はそれを聞いて、即刻に殺生のわざをやめることにした。彼は綱や罫わなのたぐいを焚やいてしまつて、その児を連れて仏寺ぶつじに参詣した。寺に呂りよという僧があつた。年は四十ばかりで、人柄も行儀も正しそうに見えた。彼は都に近い寺で綱主こうすとなつた事もあるという。その僧の前に出て、張の児は訊いた。

「あなたも生き返っておいでになったのですか」

「わたしは死んだ覚えはない」と、僧は怪しんで答えた。

「わたくしは冥府へ行つた時に、あなたを見ました」と、張の児は言った。「あなたは宮殿の角の銅あかがねの柱につながれて、鉄の縄で足をくくられていました。獄卒が往つたり来たりして、棒であなただの腋わきの下を撞くと、血がだらだらと流れました。わたくしは帰る時に、あの和尚さまはなんの罪で呵かしやく責を受けているのですかと訊きましたら、あれは齋事にあたつて経きようもん文をぬかして読むからだと言いました」

僧は大いにおどろいた。彼は腋の下に腫物を生じて、三年も癒えないのであつた。そんなことを知ろう筈のない張の児に言い当

てられて、彼は怖ろしくなった。彼はそれから一室に閉じ籠つて毎日怠らずに経を呼んでいると、三年の後に腫物はおのずから癒えた。

（同上）

馬絆

吏部尚書りぶしょうしょの憑夢弼ひようむびつ、この人は八蕃はちばんの雲南宣慰司せんいしの役人か
らしだいに立身したのである。この憑氏の話に、かつて八蕃に在
任の当時、官用で某所へ出向いた。

途中のある駅に着いた時に、駅の役人が注意した。

「きょうももう暮れました。江のほとりには馬絆ばはんが出ます。この

先へはおいでにならないがよろしゅうございましょう」

憑はその注意を肯^きかなかつた。彼は良い馬を選んで、土地の者を供に連れて出発した。行くこと三、四十里、たちまちに供の者は馬から下りて地にひざまずき、しきりに何か念じているようであつた。

その言葉は訛^{なま}っているので、何をいうのか能^よく判らないが、ひどく哀しんで憫れみを乞うように見受けられたので、憑はどうしたのかと訊ねると、彼は手をうごかして小声で説明した。われわれは死ぬというのである。

そこで、憑も馬をくだつて禱^{いの}つた。

「わたしは万里の遠方から来て、ここに仕官の身の上である。も

し私に天禄があるならば、死ぬことはあるまい。天禄がなければ、あえて死を恐るるものではない」

時に月のひかり薄明るく、小さい家のような巨大な物がごろげるように河のなかにはいった。風なまぐさく、浪もまたなまぐさく、^{せいき}腥気は人をおそうばかりであつた。更に行くこと数里の後、憑は土地の者に訊いた。

「あれはなんだ」

「馬絆です」

「馬絆とはなんだ」

土地の者は手をふつて答えない。三^{さんこう}更の後に次の駅にゆき着くと、駅の役人が迎いに出て来て、ひどく驚いたように言った。

「なんという大胆なことを……。夜中やちゆうに馬絆おその虜おそれあるところ

を越えておいでになるとは……」

「馬絆とはなんだ」と、憑たよりはまた訊いた。

ばおうせい

「馬黄精ばおうせいのことでございます。これに逢う者はみな啖くわれてしまいます」

馬絆といい、馬黄精といい、いずれも蛟みづちの種類であるらしい。

(遂昌雜録)

廬山の蟒蛇

廬山ろざんのみなみ、懸崖けんがい千尺の下は大江に臨んでいる。その崖の

半途に藤蔓ふじづるのまとった古木があつて、その上に四つの蜂の巣がある。その大きさは五石こくを盛る瓶かめの如くで、これに蔵する蜂蜜はさぞやと察せられたが、何分にも嶮峻けんしゅんの所にあるので、往来の者はむなしく睨にらんで行き過ぎるばかりであつた。

そのうちに二人の樵夫きこりが相談して、儲けは山分けという約束で、この蜂の巣を取ることにした。一人は腰に縄をつけて、大木にすがつて下ること二、三十丈、ようように巣のある所まで行き着いて、さかんに蜜を取った。他の一人は上から縄をとつて、あるいは引き上げ、あるいは引き下げていたが、やがて蜜も大方とり尽くしたと思うところに、上の一人は縄を切つて去つた。自分ひとりで利益を占めようと考えたのである。

取り残された樵夫は声を限りに叫んだが、どうすることも出来なかった。巢に余っている蜜をすすつてわずかに飢えを凌いでいながら、どこにか昇る路はないかと、石の裂け目を攀^よじてゆくと、そこに一つの穴があつた。

穴は深く暗く、その奥に蛟^{みずち}か蟒蛇^{うわばみ}のようなものがわだかまつていて、寄り付かれないほどになまぐさかつた。やがて蟒蛇は鉦^{かね}のような両眼をひらくと、その光りはさながら人をとろかすように輝いた。しかも彼は別に動こうともしなかつた。樵夫は非常に恐れたが、どこへ逃げるといふ路もない。殊に穴のなかには暖かい気が満ちていて、寒さを凌ぐには都合がいいので、そこに出たり這入ったりして日を送つた。

ある日、雷鳴がきこえると、穴のなかの物は俄かにのたくり出した。雷鳴が再びきこえると、物は穴から抜け出して行こうとするのである。

「どうで死ぬのは同じことだ」

樵夫は覚悟して、その鱗うろこの上に攀よじ登ると、物は空中をゆくこと一、二里で、彼を振り落した。しかも池に落ちたために彼は死ななかつた。後に官に訴えて出たので、彼を捨てて行つた者は杖殺の刑におこなわれた。

（湛園静語）

答刺罕

至^{しじゆん}順年間に、わたしは友人と葬式を送った。その葬式の銘旗に「答刺罕^{タラカン}夫人某氏」としるされてあるのが眼についた。答刺罕は蒙古語で、訳して自在王というのである。わたしはその家の人に訊いてみた。

「答刺罕と書いてあるのは、朝廷から封ぜられたのですか。それとも本人の字^{あざな}ですか」

「夫人の先祖が上^{かみ}から賜わったのです」と、家人が答えた。「世^せ祖^{いそ}皇帝が江南をお手に入れる時、大軍を率いて黄河^{こうが}までお出でになりましたが、渡るべき舟がありません。よんどころなく其^{そこ}処に軍をとどめる事になりました。その夜の夢に一人の老人があらわれて、渡るべき舟がなければ私に付いて来いと言って、世祖を岸

の辺まで案内して、ここから渡ることが出来ると指さして教え
ました。世祖はそこに何かの目標めじるしをつけて帰ったかと思つたと夢が
醒めました。そこで翌日、ゆうべの夢の場所へ行つて、そこか
処こかと尋ねていると、一人の男が来て、ここから渡られますとい
う。それでもまだ何だか不安心であるので、世祖はその男にむか
つて、それではお前がまず渡つてみる、おれ達はそのあとに付い
てゆこうと言いますと、男は直ぐに先に立つて行きました。大軍
は続いて行きますと、果たしてそのひと筋の水路は特別に浅いの
で、無事に渡り越すことが出来ました。軍いくさが終つた後、世祖はか
の案内者に恩賞をあたえようと思つたと、その男は答えて、わた
くしは富貴を願いません。ただ、わが身の自在を得れば満足であ

りますと申し立てたので、答刺罕と書いて賜わったのでござい
 ます。云々しかじか」

（山居新話）

道士、潮を退く

宋そうの理宗皇帝りそうのとき、浙江せつこうの潮うしおがあふれて杭州こうの都をおかし、
 水はひさしく退ひかないので、朝野の人びとも不安を感じた。そこ
 で朝命として天師を召され、潮をしりぞけるいの禱いのりをおこなうこと
 になった。時の天師は三十五代の觀妙真人かんみょうしんじんである。天師が至
 ると、潮はたちまち退いたので、理宗帝は大いに喜び、多大の下
 され物があつた。真人が法を修したのは四月十三日であつた。

然るに、元の大徳二年の春、潮が塩官州をおかして、汜濫す

ること百余里、その損害は実におびただしく、潮は城市にせまっ

て久しく退かないので、土地の有力者は前にいった宋代の例を引

いて、江浙行省に出願し、天師をむかえて潮を退けることに

なった。時の天師は三十八代の凝神広教真人である。

やがて使者が迎えに行つたが、真人はその聘礼の方法が正し

くないというので動かず、遂に行くことを謝絶した。そこで宮中

の道士をくだして、鉄符をもつて加持させることになった。道士

は塩官州に到着したが、その行李がまだ混雑しているのです、取り

あえず持参の鉄符を水のほとりに立てると、俄かに浪は立ち騒い

で、神の加護があるように見えたので、道士は喜んだ。

彼は法服に着かえ、鉄符をたずさえて舟に登った。大勢の人び
 とは岸にあつまつて眺めていると、金の甲よろいを着た神者が彷彿ほうふつと
 して遠い空中に立っているのを見た。道士は法を修して、やがて
 その鉄符をなげうつと、鉄符は浪の上に躍ること幾回の後に沈ん
 だ。暫くして一天俄かに晦くらく、霹靂へきれき一声、これで法を終った。
 それから数日の後、別のところに沙すなの盛りあがること十数里、
 その上に一物いちもつを発見した。それは海亀に似たもので、大きさは
 車輪のごとく、身には甲こうをつけて三つ足であつた。これぞ世にい
 う「能のう」である。道士はその半分を割きいて、持ち帰って朝廷に献
 じた。

道士が塩官州へくだったのち、朝廷からさらに天師に命令があ

つたので、天師も辞^{いな}むことを得ずして起^たつた。天師が到着したのは四月十三日で、あたかも宋代の時と同日であるので、人びとも不思議に思った。但し道士の修法が成就して、潮はようやく退いた後であるので、攘^{はら}いの祈祷をおこなった上に、堤を築き、宮を建てることにして歸つた。

(隠居通議)

青空文庫情報

底本：「中国怪奇小説集」光文社

1994（平成6）年4月20日第1刷発行

※校正には、1999（平成11）年11月5日3刷を使用しました。

入力：tatsuki

校正：小林繁雄

2003年7月31日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.waozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

中国怪奇小説集

続夷堅志・其他

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>